道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

ラスベガスで武術を教えているYORIKOさん（右）の指導で、「気合いイッパ～ツ！」。

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

この12月4日で、長野県松本市に移住して10年が経ちました。なんと月日の早いことでしょう。松本城から15キロほどのところにある四賀地区は、善光寺街道と東山道が交差しており、昔から多くの人が行き来する山間地。峠の入り口に在る我が集落は、昔から沢水で生活水を得て生活していました。数戸で水源の整備をしていますが、つい先日、みごとに枯渇しました。そんな時のために手入れしていた昔の水源を復活させましたが、こちらも水量が少なく、ちょっと不安な日々が続いています。今年はまともな雨が降らなかったし、信州も珍しく沸騰状態だったので仕方ありませんが、来年がもっと暑かったら、どうなるのでしょう。そういえば今年は家の周りの女郎蜘蛛が二匹しかいなかったり、蛙や蛇が少なかったりと、昆虫や爬虫類の生態にも異変が感じられました。

9月半ばには、人生に幾度もないであろう出来事に遭遇しました。トレラン練習でよく通っている標高912メートルの光城山（安曇野市）に夕方ランに行ったら、山頂でおそらくタバコの吸い殻からの発火と思われる切り株の出火に遭遇したのです。その日に限って登山者はゼロ。消防と警察を待っている間に、離れたところのトイレの水を運んでかけると鎮火してくれたので事なきを得ましたが、心臓バクバク！ 気温は27℃で、強風。その日も雨予報が外れて乾燥していましたが、山に水分がないのだなあとつくづく感じた出来事でした。そして、ボヤ以上に衝撃だったのが、山頂に通じる2本の一般道が、近々の崖崩れと長期に渡る災害復興工事による路面崩壊で通行止めだったことです。消防車など車両数台は、倒木を除去しながら壊れた路面を進んできたというので、改めて道路整備の重要性を感じ入った次第。春には通行可能になるそうなので、要チェック事項となりました。

さて、そのランニングですが、ちょうど山火事事件以降から、かなり変化がありました。玄関を開けるとフィールドなので、いつもそのまま飛び出して森の中を駆け巡っていた私。戸谷峰や三才山など標高差もある数時間コースの尾根歩きは大好きなコースで、海外のトレランの練習は、ここメインでやったほど。でも今年は、その山に異変あり。そう、全国的に出没情報や被害が相次いだ熊の出没です。以前から裏山にいることは知っていましたが、見かけないし、被害もありませんでした。今年は鹿防護策の内側に出てきた数が多く、地域でも話題になりました。山に実りがないのでしょうか。鹿やイノシシやタヌキなら驚きませんが、やっぱり熊は遠慮したいので、思い切って夜のランニングルートを大きく変更することに。大好きな光城山は一旦停止し（熊おられます）、買い出しついでに安曇野の市街地（スーパーマーケットから10キロ以内）を行くことにしました。高低差はないものの、何気に通った道が素敵な堤防だったり、清流の土手だったりで、気持ちのいいこと。博物館・社寺・道祖神なども面白く、人々の住まい方も垣間見えて飽きることがありません。熊鈴はしませんが、地元の人に言わせると、「出ないことはない」らしいですが、確率は低そうです。

そんな感じで、今年も盛岡・埼玉・沖縄など各地のオンラインマラソンにエントリー。2週間に50キロ程度ですが、現地に行かずとも自分のペースで走れて加算されるのが楽しくて、燃え続けています。コロナ禍がなかったら生まれなかったこのシステム、今の私にはドンピシャ。リアルなレースにもいつか出たいけれど、足関節2回骨折が響いており、毎週のようにトレラン大会に出ていた8年前の体に戻るのはたぶん難しそう。しばらくはこのポレポレランニングを続け、体力アップを目指します。次の10年後も、自然の中に住まい、毎日楽しくジョギングできていますように。そして熊たちが降りてこなくて済むような豊かな森でありますように…。

ボヤの翌日、チェックに行った光城山の山頂。これで済んだのは奇跡かもと安堵感。

穂高川とワサビ田を貫く気持ちのいい堤防道。アルプスの姿がどんどん変わります。

4キロ続く豊科は谷原堰沿いのワイルドな土手。常念岳・山麓の灯り・畑が面白い。

休日の昼間によく走る四賀の農道から見える戸谷峰と三才山。また行きたいよ～。

この夏もみんなで頑張った水源整備。そういえばすでに沢の水は少なかったかも！

九州の散歩道

現役で動く国産最古の「アロー号」

フリージャーナリスト　湯浅玲子

福岡市博物館には「アロー号」という名前の古い自動車が展示されています。実はこの自動車、現存する国産自動車としては日本最古、しかも今でも動きます。製作したのは福岡県芦屋町出身の矢野倖一です。

今では日本を代表する産業となっている自動車ですが、19世紀に開発された当初は欧米が産業の中心で、日本はまだ自力で自動車を製造できませんでした。そんな中、国産自動車づくりに挑戦した1人となったのが矢野倖一。当時は福岡工業学校機械科で学び、エンジニアを夢見て模型飛行機のエンジンを手作りするような青年でした。

模型飛行機大会で最優秀賞をとった矢野のもとに、ある日1人の実業家が訪ねてきます。福岡の実業界で活躍していた村上義太郎で、所有するフランス車の改造を依頼してきたのです。当時は自動車に関する情報がほとんどなく、海外の自動車の写真を参考にしたり、エンジン製作の知識を生かしたりしながら、手探りで改造をやり遂げます。完成品は大成功というわけにはいきませんでしたが、矢野が自動車に興味を持つには十分な経験でした。

学校卒業後、村上の援助を受けて本格的な自動車製作に乗り出した矢野。設計開始から試行錯誤を重ねること3年、ほとんどの部品を手作りして、1916年に純国産車のアロー号が完成します。名前は矢野の名字「矢＝アロー」からきています。アロー号は日本初の国産車ではありませんが、現在もそのまま残っている車としては日本最古です。平成21年には日本機械学会によって「機械遺産」に認定されました。

その後、矢野のもとにはさまざまな自動車製作の依頼が舞い込むようになります。独自の装置で製作したダンプボディなど、創意工夫が求められる特殊な車が多かったようです。矢野が起こした自動車車体製造業は、現在も株式会社矢野特殊自動車として続いており、冷凍車やタンクローリーなど特殊用途の車を中心に製造しています。

アロー号が福岡市博物館に寄託される以前は、矢野一族が自宅で大切に保管してきたそうです。アロー号を置くための特別なガレージもあったとか。完成から100年以上経った今もちゃんと動くことから、いかに大切にメンテナンスされてきたかが分かります。

（写真提供：矢野特殊自動車）

1916年の完成当初に撮影されたアロー号

矢野特殊自動車の創業者である矢野倖一氏

アロー号を大切に磨く矢野倖一氏

ハッと思いました

近年は自分の口から発せられる言葉に、「今のは大丈夫だった？」、「何か突っ込まれる所はなかった？」と言葉狩りにドキドキしたり、あたふたしたり。

「男らしい」とか、「女の子らしい」とか、「子供らしく」とか「社会人らしく」とか。いかにも日本人が得意としてきた表現（？）の「～～らしい・～～らしく」という言葉に対して、LGBTQの大波にのってか、差別とか平等とかがあらゆる機会に話題になり、それもかなり事細かな場面において指摘されるようになっていますしね。

気軽な会話が出来ないなァと頭の中にはコンプライアンスの文字が。会話もAIを通してやらないとなあと思ったりもします。

私は70年代のフォークソングをよく聞きます。しみじみと歌詞を噛みしめながら言葉を聞いています。半世紀をぐむ事、現代の社会情勢を憂いている言葉も多々あります。勿論コンプライアンス的に今ではダメなものもいっぱい。

今や個人を番号で管理され、ポイント・キャシュレスで現金不要の時代。クルマに至っては手放し自動運転の時代です。古い人間には受け入れがたい時代です。

クルマの運転の基本は安全をベースにした利便性を得る事。これは今も昔も不変な事だと信じてます。そして運転とは人が行うもの。だからこそドライバーの心得が大切なのです。

小さな事かも知れませんが、「出てこないだろう、止まるだろう」と言う『だろう運転』ではなくて、「出てくるかもしれない、止まらないかもしれない」と言う『かもしれない運転』で、安全運転を心掛けたいものです。

言葉狩りにびくつくよりも、ドライバーの責任と心得にピリッと気をはるべきですね。